Ugu'su no, koye nakari seba, yuki kiye nu ;

yama–sato ikade, haru wo shira maji.（下に譯あり）

女學雜誌第拾六號目次

●社說〕女權の保護を要む●新報〇數件●叢話〇新よめに告ぐ〇木村長門守の妻の手簡婦女立志の說〇立志ハ立身の基なる事〇立志ハ男子に限らざる事〇今日ハ婦女立志の秋なる事●佳傳〇祇王祇女佛前の事附圖●寄書〇友達の物學ばんとて亞米利加に行に送る文二章（私立大坂女學校生徒作文）●音樂取調所高等女學校の新報二件追加●官報〇宮內省第二號（華族女學校職員及び官等俸給改正）●諸廣告

二月廿五日

うぐひすのこゑなかりせばゆききえぬ

やまざといかではるをしらまし

●各國の諺

●流行　璉馬克の諺に狂氣染たるアン（女の名）は溝の內に上衣の裾を引きずりながら貴女より貴女の出來心があると云ふと

●婚姻　西班牙の諺に婚姻ハ一ケ月の喜に一生の悲みなり云ハゞ肩衣を破るとと金を遣ふとと女の舌に聽聞そる位が決局なり

●勇怯　佛蘭西の諺に山氣あければ馬も驢馬も取れず山氣多ければ馬も驢馬も無くなる

●皆無　伊太利の諺に鰻の尾とつかまえたると女の言葉を賴みとするハ到底手の中にあらぬものなり

●急變　佛蘭西の諺に王樣の愛顧に、四月の天氣、女の愛情に、薔薇の葉、賽の目にカルタの板ハ一分の間だに變化そるなり

女學雜誌第拾六號（明治十九年二月廿五日）

●社説

○女權の保護を要む

空を鳴き渡る鳥も夕べには宿るべき木梢あり野に求食りて定れる住ひなき狐も晝はかくるべき穴あり茲に万物の靈と云へる人間の妻にして三界に家なしと云はゞ果して之を鳥狐にまさるべしと云はん乎古來孔子の教尊まれて女子を小人と同樣の者と見做され佛教流行て外面菩薩の如く内心は夜叉の如き惡魔なりと卑まれて彼の唐人が人間生れて婦人となる勿れと云へるを尤もなる議論の樣思ふものゝみある景況とはなれり凡そ世の開けざる時に當りては何處の國に於ても強き者弱きを制し男子女子を壓制すること免れがたき勢なりしとは云へ我國の如く太甚しかりけるは多く例を見ざることなり戰國の時代に當りては娘を嫁して敵の心を安んじ母を質として敵の心を喜ばすなんど大凡そ婦人なるものは皆な一個の器械道具の如く思はれたり左れば婦人も亦た自ら其の身を卑しみて到底男子の壓制には從ふべきものと觀念し如何なる苦勞如何なる屈辱も男子の命とあれば喜んで之に從ふべきものと覺悟するに至りたること其の情實に愍れむべくして其の行は尤も惡むべきものあるなり

古來の習慣如此なるより人生の最大事にして男女の間に行はるべき最切要のものの婚姻の如きも太甚しく其の主意を誤りて今日は聽くも忌まはしき有樣のみとなれり男子の妻を娶るや必しも其の人と爲りを承知するにもあらず維新前は婚姻の當夜初て妻の顔を見るなんどの事一汎なりしが今まは會席の一見寫眞の送り還り等にて一生の大事を定ることゝなり初めより必ず同穴に入るべきものと思ひ合はする如きは最と〳〵稀れなり左れば女の男に適くや孔子の教に云ふ如く其の許に歸るやうに思ふものは實際に絕てあるなく一度び去られて家に返ればたゞ再應の口なきをのみ愧る有樣となれること實に慨歎すべき限りなり

先づ今日の婚姻を一二の實例にて物語らんに或る代言人ありて其の妻を娶らんとするに某氏の娘年の頃も已に恰好なりとか聽き込みて之を貰ひ受けんと思ひ付き先づ其の年齡を承知せんと或る友立二三人に問ひ合せたるに其れ姉なるひと何才なればあらましは云々ならんと云ひ否な之れよりも長けたらんと云ふあり然らば戸長役場に行て取調べんとて打連れて役所に行き其の一事のみは事明かに分りたれど容姿のことの評判のみにては安心ならずと思ひ某氏の前向なる家に密みかくれてある老母にかの女を呼び出ださせ其の有樣を一見して直ちに結納を送りたりと

ぞ斯て此の女と云へるは其地方の教員の娘にて都合三四度婚姻したるものと云へり」又た東京の或る學校に教員たる人二人三人寄り集ひて種々の雜談するとき一人他の一人に向ひて某氏にある女あり之を娶り玉ひても如何んと云ふ其の人もとより妻をめとらん心なしと云へど先づ其の顏のみを見るも時の一興ならんとて時を期し目見えに伴ひ來らんやう頼みけり然るに相ひ見たる節にはかに之を娶りたき樣思ひ出でゝ遂に其の旨を申し出だし直ちに結納を送りて所云る偕老の式を行ひたりとぞ

凡そ始めあるも何日終なきは事物の常なるを初めよりして斯の如く輕卒に相ひ合ひたるものゝ如何ぞ末久しく睦み暮すべき縁あらんや遂に妻と疊とは新しきを可とするなんどの諺あるに至ると尤なる理なり現今世の上流に立ちて木擇を以て任とする論客より婦女改良を以て其の業とする人々の行をきくときは妻を出して妻を迎ふるを其の私德にかゝはりなきものと認め糟糠の妻は直ちに堂より下して昨日の下婢にはかに堂に上るなんどは敢て奇とせざる有樣となれり

此を以て夫は家に妾を畜ふるも其の力量なりとして妻の口を容るべき限りにあらず夫は芳原に花を手折りて夜遲く歸るも行先を守るは妻の禮にあらず夫は樓に酒肉にあくも交りの博きは妻の訴ふべき限にあらず自由氣儘は男子の常にして万事に内目なるは女子の天性なりと定め貧苦には朝夕婢の如くおひ使はれて家富むに至れば則ち去らる其故を問へば家風に合はずの一言亦た返へすべき言葉を壓ゆるに足るべし妻の一生要へとするは去らるゝとあらんにあり少しく逆らはゞ去らるゝなからんか少しく自由にせば去らるゝなからんか万事に不平を壓ゆべきは只だ此の去らるゝとあらんを思ふが爲めなり然も色衰へ氣適はざして一朝三行半の証書を投げ付けらるゝとあれば家に歸りて父母に訴ふるもたゞ其身のふつゞかなるが故にありと叱られ近人は指ざして反つて無理の夫をそしらざる如きと今日一体の有樣なり

抑も婚姻とは男女の間に取り換はす一生最一の約束なり若し一方に於て此の約束を破らば理に於て其の償を要求すべきと固より不可なきとなり然るに今まの妻の夫に於けるは婢の主人に於けるよりも尙ほ太甚しきあり十數年間下婢と追ひ使ひて一朝之を叱り出し一錢の給料をも拂はざらんには下婢は之を法庭に訴へて直に曲直を理論に判し得べし然るに妻にしてもし如此き場合にあひ時としては其の荷物衣服等までも返付されざるとあらんとも之を訴へて勝を得べき條理も明かならざる次第なると女

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

權の屈辱も亦た甚しと云ふべし夫の妾を畜へ遊女にたはむるゝ如きは既に夫たるの約束を破りたるものなり然れども妻よりして離緣を申し出たすべき權利もなく忍びて彼の離緣を請ふも三行半を受けざる限りは妻たるの名義を消すあたはず男は世に生れて何の故にかゝる特權あり女は世に出でゝ何の故にかゝる屈辱を受くべきものなるや吾人は殆んど其の理由を見出すあたはざるなり然るに歐米に於ては男子にして若し夫たるの約束を破るとあらんには妻たるもの直ちに離緣を請ふの權あり或は別居して夫の來訪するを拒み然も月々の入費を之れより要求するを得る等の權あり夫にして妻の權を侵すとあらば寸毫も之を許さゞると實に歎美の至りなり夫婦の間如此して互に敬し互に尊むの情あるに非ずんば決して眞正の愛情あるを望む可らざるなり抑も我國現今の婚姻は其の始先づ之をつゝしましめて以て終を克するは敎を守らするに至らせんこと固より必要の事なりと雖も數百年の習慣を矯るは一朝の事にあらず吾人は政府に於て婚姻條例を設定し離婚を制し女權を保護するの政を施さるゝを以て改良第一の順序なりとせり夫猥り氣儘にして妻の之に制さるゝ今日の如きは一日だも續かしむべき有樣にあらず吾人は先づ女權の政府の手に依りて保護されんことを希望するもの也

●新報

○陳言　前号に改進新聞の批評を載せたる際吾人の一言をも添えざりしより事情何の故なりやなど問るゝ人も少からず吾人は素と密通の續き物、間夫の以下次号、なんどを樂しみとして讀み玉はざるやう注意したるまでにて添て有益なる新聞紙三種の案内したることなれば何人と云へど爭ふ可らざる明白の理由あることなれば復び說明もせざりきなり同新聞にして實際かゝる善き主旨を日々の紙面に現はさるゝとならば吾人は之をしも讀者に案内し參らすべしたゞ何事も言行の一致なるをこそ尊むなりまた彼の察するに何方よりかの依賴をうけあんどゝあるは幼氣にして答ふるに愧かしその三新聞の可なるとは目ある人々の公論なるべしと思ひて答は申さゞるなり

○皇后宮御編著　の書籍何讀本とか云へるは先に華族女學校へ御啓ありたる節生徒の方々へ一部づゝ賜はりたるものにて固より民間私人の拜覽し得たるものならねど聞く所によれば近々之を出版して世に御惠の言の葉を施かんとする人ありとか云へば吾人は一日も早く之を拜覽するの榮を得んことを希ふ者なり

○華族女學校　は追々に盛大となり事務も益々整頓するよしに聞き及びたるが過る日の發令により教授幹事などの位置も定ま

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

り下山歌子氏ハ學監となりて同校を總理し玉ひ新に教授となり玉へる人もありて學事もいよ／＼進渉する趣きなれバ及びぬ日本婦人の最上流に立ち未來の女風を造り出し玉ふ方々の集り場なれバ日に月に進歩して上ハ　皇后宮の御志をやすめ奉り下も万の婦女の鑑たるに至らんと仰ぎ願ふになん

○藝妓　本誌上ニ屢バ記載したる如く玉侯貴人の宴會は言ふに及バず大凡そ禮義ある晴れの座敷に藝妓を招かるゝ如き弊風ハ斷然廢止したきものと思ひたるに今度の改革より此の風ますかに行るゝこととなり今ハ既に片陬の田舍までに及びたるハ最と喜ぶべき限りなり吾人ハ今まかゝる喜びの音一つ二つを集めて左に掲げ示し多年の素志の少か行るゝニ至りたるを祝そべし

官吏にして猥りに飲食店に登り藝妓を聘び又た娼妓に昵む等の事ある時ハ例に照し夫れ／＼の制裁を與へらるゝとの事にありしより斯る事にハ斷行の名ある鹿兒島縣官吏諸君は眞先掛けて內規を設け如何なる場合にても藝妓を聘ぶまじ飲食店に登るまじと堅く誓約を結バれしに付き同地の藝妓どもハ長崎下の關へ住替るもあり或ハ大坂京都等へ逃歸るも多しとかや（本年本月十九日々新聞）

小崎岐阜縣令の內喩に據り同縣收税長清水勝定氏は卒先して收税課員一同へ演達さるる所ありしかバ同課中にては一の趣意書を草し帳簿を作りて自今藝妓を聘せざるは勿論藝妓の侍する宴席へハ公私內外とも一切出入せざると幷に冠婚喪祭に接待さるゝの外ハ酒樓へも登るまじき旨を盟約し調印さるゝこととなりしと又同縣醫學校にても去る二十八日生徒一同へ自今藝妓を聘そる等の事ハ如何樣の場合ありとも相成らぬ登樓も決して相成らざる由を演達せられ職員一同にも堅く聘妓嚴禁を守るとのとなりと去月三十日の岐阜日日新聞に見えたり

○優美の諧謔　麹町有樂町に住れる、華族松平某君ハ後室ハ夙に敷島の道を嗜ませられ召使ふ下婢までにも此道を教へ月の夕花の朝思ひを三十一文字に寄せて樂ませられけるが一昨夜ハ陰曆の大三十日に加へて節分の夜なれバ下婢のムラ（十七）と云へるが例の福茶を煎て後室に参らせんとてしとやかに御前へ持ち出でし時如何になせしや其茶碗の故もなくして二ッに割れ福茶ハあたりに覆れ散り山吹の沫近れバ傍にありし老女の某額を蹙めてコハ忌々敷ことをなそものかなお初を参らせんとせし福茶の茶碗御手に觸るゝ際にて二ッに割れしことハとつぶやけるを後室ハ打ち笑ませ眼ニ見えぬ鬼神そらも其德に感じて猛き心も和らぐる和歌なるものを凶を轉じて吉となし禍を變ずて福と

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なす事のなからめやムラの即吟こそ望ましけれと仰せければムラは有難き御後室の仰せにあるかな御笑までにと取敢へず「年の夜に汲みたる福のひろがりて上の恵みに下の潤ほひ」と申上ぐれば諺にも福來りと云ふ笑の門を開き坐に居る人々一同にドッと興じけるとなん此ムラは千住在花又村の農家某の二女にて敷島の道には尚ほ初心なりとは聞けど句の巧拙は姑らく問はず誠に優しき心懸けにこそ人の上流に立ち世の龜鑑とも云はるゝ華族の地位に在りながら醜聲を江湖に流すものも多きに今此後室の下婢を薰陶せらるゝを見るにつけても其平生を思はれていと優美なり（本年本月五日朝野新聞）

○看病婦講習所　愛宕下の有志共立東京病院内へ新設の看病婦講習所は去る十五日開所したり同生徒は二十年より三十五年迄の者にて其學期を二年と定め解剖生理二學の大意其他看護に適用の諸術を教授するよし（本年本月十六日報知新聞）

○結婚の新式　舊棚倉藩主子爵阿部正功氏は去る一日徳大寺侍從長の令妹照子と結婚せられたるが其式は同藩の禮家有住齊氏が各禮家と謀りて編制したる折衷式をはじめて執行したるものにて伊弉諾伊弉冊尊の神壇を設け之に榊餅神酒杯など供へ神前に於て新夫新婦は誓を立て三獻の式を行はれたりと（本年本月三日朝野新聞）

○婦人同伴會　文化駸々の今日男子は毎日外に在て社會公共の事件に汲々尽力するの曉に婦人は只内に居て我が良人の日々交際協力する士人の顔をも知らず又其良人等が相親信往來して訪ひ訪はるゝ士人の家族は如何なる人なるやも知らざるは餘り迂濶なる次第に付家族相互ひの交際も開き度とて此程當地學校教員諸氏の細君中には此事を良人に打ち語る向もありて近々同諸氏中より婦人同伴會と稱し公園某館の如きに於て夫妻同伴の一懇親睦會を催すよしなり但し此會に出席する婦人は彼の男子に携帯せられて宴席に侍し酌を執て男子の醉を勸め又は獻を弄して男子の機嫌を執るが如き奴隷卑屈の風を學ぶにあらずして矢張良人等と同く相談じ相話して其氣象と意向をも漸次に會得し往々は良人事業を執るの一裨補となるべき事あらんと希望しての思立なりとぞ（本年本月三日福岡日々新聞）

○婦人讀書會　輓近當地にて風俗改良の談盛にして就中婦人論に關しても其談多く頃日婦人同伴會の計畫ある趣は嘗て記せしが今又婦人讀書會を催すべしとの談あり此讀書會とは細君阿孃が一場に會して縱令ば品行論（スマイルス原著中村敬宇譯述）の如きを讀み若くは其中に階級を立てゝ三段位ゐに區別し兎に

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

角文を以て會し婦人に讀書の力を得せしむる方法なり東京にてハ已に此會の催しありて大山夫人が會頭となり井上令孃の如き女流の出席ある由なり（本月七日同上）

○裁縫教授に關する達　大坂府下に於て裁縫仕立屋又ハ通常の婦人にして豫て各家の少女に裁縫を教授し居る向き少なからざるより同府にてハ今度右等の向にして三人以上を教授し居る者を至急取調べ申出づ可き旨各區郡役所を經て其部內各戶長役場へ達せられたり（二月十三日大坂日報）

○西洋婦人服地の丈尺　越前產の絽織物を外國へ輸出し婦人の夏衣に供せんとの計畫あれど其丈尺等を何程にして其需要に適すべきや判然せざるより頃日福井縣より農商務省工務局へ其取調を依賴ありしに付右衣服地は外國品見本に依るに幅は我曲尺二尺五寸丈は七丈二尺乃至十四丈四尺にて然るべき旨を回答されしといふ（二月十七日報知新聞）

○近衛女兵隊　昨年八月刊行の伊太利新聞中亞非利加「ダラメー」國の女隊に係る一項を掲載して曰く近來亞非利加「ダラメー」國王の軍功を奏したる一種特別の兵制に依ると雖ども女兵大隊の力に賴ること最も多し曾て此の國に漫遊し現に此兵隊を目擊したる獨逸人「ヅレル」氏の言に據れバ近衛女兵隊の兵員六千人ありと此兵ハ悉く皆皇后の號を有す加之ならず幼時より休育を專らと爲すが故に其の腕力勇氣忠節に至りてハ同國の男兵に勝るあつて劣るとなし然れども直接に攻戰に臨まざるを以て例とせり此女兵隊の任ハ夫にして兼て主君たる國王陛下を護衞するを主とし又踏舞の職を兼任せり故に踏舞及び廻轉を最も巧にす式日にハ必ず踏舞の催しありと「ヅレル」氏曰く黑人種の女兵大隊より美なる者ハ未曾て見たることなし此女兵ハ身体皆な巨大にして頭に白布を頂き其の上着は紅色の絹衣にして下衣ハ綠色或ハ青色なり腕頸及び足をバ露ハしたり且つ革の腰帯を宛て劍を帶び藥包箱を附け其の外小斧小銃各一個を携へたり士官は諸種の色の飾帶を以て兵卒と區別す現役の女兵ハ廿五歳以下十八歳以上なり云々と去る十四日の內外兵事新聞に見えたり

○引移り　東京師範學校女子部は來月一日より上野の教育博物館內へ引移り其跡は東京師範學校へ合はさるゝよし去る十五日の時事新報に見えたり

○皇女御降誕　權掌侍東園祥子にハ去ぬる十日午前二時めでたく分娩され皇女御降誕せさせ玉ひしよしに承たまハり侍りぬ（去る十三日讀賣新聞）

●叢話

○新よめに告ぐ

左の一篇は井リアムと云へる老人が其の姪に夫の愛を受る心得方を敎へたる物語なり固より西洋人に行るべき心得方なれば之を其儘に用ひんとは不可なる所もあらんと云へどよく其の主旨とする所を味ひ玉はゞ我國の婦人方にも亦た大なる助けあるべし

或る日吾が甥來りて夫婦ぐらしの面白からぬことをつぶやき何卒暇あるとき吾が妻を訪ひてくさ〴〵の御敎をもたまはれかしと云へり此の妻と云へるは即ち吾が姪なれば心安からず思ひて其より直ちに其の家を訪ひたり

姪は常の如く挨拶して幼き時より仕來れる如く吾と接吻し吾と迎へたれど何となく面白からぬやう見えて樂し氣なる景樣なくかつては吾が前に歌ひたる歌とも吟ずべき勢なく見えたり

吾は彼の甥とひとしく何事をか憂ふるならんと思ひてマーリー(姪の名)よ吾が側に來りて座し玉へ汝は何事とか物案ずるやうに見ゆるなり婚姻したる夫婦ぐらしが或は憂の種にはあらざるかと問ひたり

姪は暫し吾が顔を打守りたるが膝を折りて吾が傍に座し吾が肩に頭を置きて息ろゝりしたれば吾は手を其の背にまはして抱き乍ら緑の髪を后よなで上て額に接吻したり暫くして姪の云ひけるは叔父樣よ私は眞に不幸の身にて失望のみでおりまするとかこちたり

おゝマーリー失望とは何事をか失望し玉へるか汝婚姻したる故にてはあらざるや(姪)眞よ〱左樣でこそ婚姻したるも爲に斯く失望することが出來ました(吾)そは眞に聞くも悲しきことなり然れど如何なればかく失望することなれりしやと問ひたり

姪の云へる樣は如何なればと云へることを明に申上ん言葉もあらねど吾が夫エドワルドと私とともに樂しからず思ふと申上るより外に致し方御座りません吾が夫は前日とは何となう異り玉ひ私の身に氣付けて保護を爲し被下ても前の如くならず左れば時としては我夫に對する私の愛情の全く失せたるやを悲む程の事もあり夫と私との間ひには何物か隔離れかきを作るやうに思もれます夫は前の如く私に話し玉ふこともなく前の如く私と取扱ひ玉ふこともなくたゞ物言ひ玉ふ毎に私の落度を見出して卑しみ輕ろしめ玉ふやうにのみ私には聞え侍れば私の前の如く御側に近寄るを心恐ろしく思ひ只だとも〱に成るべく言葉數を減らさんとのみ致し合ひ夫も私を愛し玉はず私も吾が夫への愛

情を失ひ候とて其の胸に感じの波うたするが如く見えたり吾は姪のハンケチを取りて其の涙を拭ひ乍らチヽ〳〵其は眞に悲しきことなりさぞかし心を苦しむることにもあらんと云ひければ姪は叔父樣私は眞に哀れの身にて失望のみで御座りまするを歎きたればは吾は否々まづ倘は望あり汝に對する愛の悉く失せたるにはあらずと云ひけるに姪は吾を見上て涙のうちにも半ば笑顔したり

吾は姪に向ひ愛情も倘や全く失せたるにあらずまだ殘る所のもはあれば姪もし賢く取扱ひたらば再び夫の愛を受けて今の如き心配を悉く去ること難きにあらずされど何故に今の如く互に不和となりたるやを考へ置かでは又た〳〵他日の損となりなんと云ひて且つ教へたるは汝夫に婚姻したる后ち余りに親しく睦みたる間だに何事か心に快からず思ひたる一事の初めにあらざりしや吾が見る所にてはエドチルドのシャツと云ひ其の髮の毛まで初め汝と夜會に相會ひて遊びたる頃ひの如く淸らかには見えず汝之を見て心に何事とか思ひたる種なかりしや曾て吾と汝と共に座したるときエドチルドが首飾りを汚なくし手首のかざりを省きて來りたるとき汝の面色をも快よからず見えて暫の間もかゝる風にてあらずもがなと云ひけんやうれ有樣に見えたることありと云ひければマーリーは驚きてチヽ其の時私の感じたる心は何人も悟り得玉はじと思ひたるに叔父樣の御目の鋭きには恐るべきことに候と云へり

ヨシ此れたゞ一つの事なれどエドチルドも日々の仕事にて夜おそく歸りたるとき前に云へる如き有樣にありしことも最と多かるべし其の風姿の何となく美しからぬより汝の心には知らず識らざるうちに尊敬の心を減じ隨て快からぬ身態をも思はで爲したることのありぬべきなり斯かることの集るとき即ち夫の愛を追々に失ふ基とはなりたらんと云へりしに姪も成程ど左樣にては候はじとは申し兼ねまする私には夫に惡しき風姿ありしと思ひし程のこともなしとは云へ知らざるうちにかゝる思あり〳〵見ゆる身態の外に現はれたることも候ふならんと云へり

（未完）

○木村長門守の妻

元和の役大坂の城すでに陥らんとするとき豊臣氏恩顧の人々は皆な先を爭ひて忠義の犠牲となりたる多かるうちに木村長門守重成は國士無双の聞へたかく戰場に芳名を殘して打死したる後ちは首の髮にふくみたる香を放ちて死后の覺悟の優なると思はせたるなんどあつばれの武士なるが之をしてかく死といさぎよくさせたるも必竟はその妻の力亦た與りて力あることあるべし打

死の前へ妻より送りたる手帋ハ左の如し

一樹のかげ一河の流れ是れ他生の縁と承まり候にころろもおとゝせの比よりして偕老の枕をなしてたゞ影の形に添ふが如く思ひまゐらせおもハれまゐらせ候此頃承まり候へバ此の世限りの御催しのよし蔭ながら嬉しくまゐらせ候もろこしの項王とやらむハ世に猛き武士なれど虞氏のために名殘ををしみ木曾義仲ハ松殿の局に別を歎くとやらされバ世に望み窮りたる妾が身にてハせめて御身御存生のうちに最后を致し死出の道とやらすにて奉待上候必ず秀頼公多年海山の御鴻恩御忘却なきやうねがひあげまゐらせ候めで度かしく

長門守重成様　　妻ゟ

○婦女立志の説

立志ハ立身の基なる事

古來名を揚げ家を興したる人々の傳を見るに皆な初めより名高く家富みたるには非ぞ素と大抵貧賤にして世に知られざりしに一旦志を立てゝ奮發勉強したるより遂にハ今人にすら尚ほ追慕さるゝ身分となれりしなり中村敬宇先生の譯述ありたる西國立志篇を繙けバ人の身を立る秘訣ハ只だ其の志を立るに在ることを明示して如何なる遲鈍の人も志を立てゝ練磨すれバ非常の才子となり如何ある窮苦の人も志を立てゝ奮勉すれバ巨萬の富者となるべしと云へり今ま一二例を擧れバ大理學者牛董ハ學校に在りし時最下の等級に列して其下には只ゞ一人ありしのみなりしが一日上等の童子に跡れて辱を受けれバ此の時大に慷慨し學者と爲りて之に優んとの志を立てゝ勉學したるより后にハ當時世界に名を轟し今に至るも尚ほ人々の尊敬する大學者とはなれり又た我國近世の儒宗伊藤仁齋ハ赤貧にして妻子を衣食するだも難く歲暮に糯餅を買ふ能はざるより其の外套を脫して典質し漸く一二片を買ひて其子に與へたる程なりしに少りし時一旦堅立したる志ハ毫も屈することなくして遂に一世を風靡する所の大學者とはなれり其他有名の人々の傳紀を見るに凡ろ晏然として奮發立志することなりし者にして身を立て家を起したる者あるなく若し其身元來貴人富者なりしならバ大抵は皆な其の富貴を失て困難に陥れるが如し

立志は男子に限ざる事

立志の大切なることハ男子のみに限らぞ婦女も亦た志を立てゝ藝を修め身を脩るのバ得あるべきことハ勿論にして彼の貞を守り操を破らざる如きハ皆な確固たる志あらざれバ爲し得難き者なり古來婦女の中に非常の困難を忍びて大發明を爲し又は多年の辛

苦を耐へて大富貴を得たりなんど云へることの余りに聞へぞして立志篇中には大抵男子のみの儀範なることなれりしは固と婦人は男子に從ひて之を補佐するの任あるものなれば其の功德は反てたゞ男子の名のみを揚て其身を顯はさゞりけるの故にも因ることあらんが大抵は男子が暴りに婦女を壓制して其の自由に發達するを妨げ之として才學を增し志氣を進る等の事を爲さしめざりしに由ることなるべし若し斯ることなくば婦女の中に牛董仁齊の如き人物現出せざりしにも非るべしと然か思はるゝなり

今日は婦女立志の秋なる事

然れども今は西洋文明が美風我國に傳はりて男尊女卑の舊説漸く廢れ近來は女風改革の議論大に盛んとなりて女學校の設立は月々に加はり女教育の新聞は日々に新なるの景況あると尤も賀すべきなり但し世は如何に進み人は何程に改るとも女は到底男子を補佐するに足るべき天理あれば男女同權など云へる空論は吾人の固より好まざる所なれども婦女も亦た男子と同等の人類なれば男子と補佐するの任に對しては十分に盡を所なかる可らず亦た其の同流の娼となり妓となり妾となれる者尚ほ甚だ多くして畜類にだも劣れる破廉恥を行ひ恬として顧みざる如き婦女尠からざれぞ之を救ふべき責任に對しても今の婦女たるもの亦た十分に盡を所なかる可らず此故に今日は是れ婦女立志の秋にして確乎たる志を立て氣を勵まして日夜勉强し此等の義務と盡すことに心掛くべきなり

●佳傳

○祇王祇女佛前の事

世に白拍子と云ふ者あり漢家には虞氏。楊貴妃。王昭君。などゝ云ひしは是皆な白拍子なり吾朝には鳥羽院御宇に嶋の千歳。若の前とて二人の遊女舞始けり始には直垂に立烏帽子腰の刀を指て舞ければ男舞と申けり後には事ごら荒しとて烏帽子腰刀を止て水干に袴ばかりを着て舞ふ其比ろ京中第一の白拍子あり姉をば祇王妹をば祇女と云ふ天下無雙の舞妃と披露しければ入道彼等を召す劣ぬ弟子ども二三人同車して祇王祇女參れり五人の女侍所に弁居たり入道先づ景氣を見れば紅顏色鮮かにして白粉媚を造れり容貌品こまやかにして蘭麝の匂なつかし舞歌へと宣ひければ

蓬萊山には千歳經。萬歳千秋重れり。松の枝には鶴巣食。巖の上には龜遊ぶと

同音に歌ひ澄したりければ入道興に入給へり頻鳥の音和かに仙女の神妙なりければ見れども聞ども飽べしと不覺とて姉の祇王

を殿中に召置て最愛せり妹の祇女も姉の光によりて洛中に耀り寵愛の餘り親はいかなる者ぞと問れければ童も母も元は遊者にて閉と申けるが年闌齢傾きて六條堀河なる所にしづかなる有様にて侍ると申すさてハ糸惜き事やとて筑後守家貞に仰て衣裳絹布の類を送遣れそのみに非ず毎月に時料雜事と運入るかゝりければ家中大に榮て從類、眷屬來集る色立る者爭ひ加程の幸有べきとてかたへの遊人共申けるハ寶や祇と云文字をばカミとよむ也神は人に翫らやまるゝ上神にハ人恐る事あれば吾らもあへものにせしとて祇一○祇二○祇三○祇福○祇德○なぞ名を付けるところ笑しけれ角て家富み人恐たり三人の心の中置處なく目出き事に思程に天下無雙の能者出來れり佛御前と云者の歌と聞き舞と見る者目を迷し耳を峙つ祇王祇女にハ雲泥を論じて勝りとぞ云ける或時大政入道の亭へ推參して家貞して申入る折節一門群集して酒宴の場也入道 宣けるハ左樣の遊び者なんぞ云者ハ可隨召事也罷出よと宣へバ仰の上ハ罷出侍るべけれ共世人の佛こそ此御所より追出され進せて耻に及ぶぞと申侍らん事の道狹 覺侍り又憂身の事ハさのみあきなどや御情とハ忘させ給ふべきと申たれ共いや〳〵祇王此中にあり舞も歌も爭まさるべき縱佛ともいへ神ともいへ名にはめつまじ急出よと宣ふ此上ハ佛罷出けり

祇王入道に申けるハ我身も經候し道也いかに本意なく侍らん童殿中に有事をバ佛も知て侍ーにハさもと思召つらめども祇王が妬心にて申留たるにこそと思侍らんも耻し道を立る者折を伺ひて推參尋常の事也君に召おかれ進せざりし時ハ童も推參をのみこそし候しが何となく御目にかゝりて見參に入たりしうれしさ空く罷出しはづかしさ只今の佛御前が心の中被推量て絲惜く侍り何か苦かるべき見參して舞一番御覽じ侍りしとわりなく口説申ければ左も右も祇王が計とて安部資成を以て遙に歸りたる佛を被召返て宣けるハ罷出よと云つるを祇王が吾經し道也召返せと樣々云つればバ佛に見參するぞ折節吾前に杯あり何にても一ツ申せと聞ければ

君を始て見時ハ○千代も經ぬべし姬小松○御前の池なる龜が岡に○鶴こそ群居て遊なれ

と折返折返三度歌ひたりければバ入道祝すまされて興に入り給へりア、思にハ似ず目出仕たり祇王にも劣らず歌の音のよさよイシ〳〵と囃られたりさらバ舞一番と宣へバ佛ハ水干に白き袴著て髮結あげ調子取負せて

德 是北辰椿葉影 再 改樽 猶 南 面松 花色十返

と朗詠しけり廣廂に筵しのせて器量の侍に鼓うたせて佛祝の白

拍子かぞへて舞澄したり其事からは髮ながくして色白く形こまやかにして媚多し楊貴妃が花の眼。李夫人が蓮の睫。夏野の萩の風に靡く有樣。翠の山に月の出るよそおひなり淋袖とハなのろご翻りて彩雲の翠嶺を廻るが如く絢袂とぬいもの丶たもとひらめきて碧浪の蒼濱にたゝめるに似たり入道ハ始より横目もせぞ打頷許々よだれとろ〳〵垂して見入給へり天性入道ハ善事にも悪事にも前後をも顧ミぞ逸早き人にて心の中に舞の終を遲々とぞ待給ける責ての歌に

よしさらば心の儘よつらのれよ。さなきは人の忘かたきよ

謠て舞ければ嗚呼入道が上をこそ舞れぬれとて手を揚て是へ〳〵とぞ請し給ふ佛と是と聞ぬ由にて猶責けるを入道座を立手を取て引居たり遠てハ中々思ハぬ心もありつるよ近く置て見給へば情ある柳髮の色に染しハ春の思亂やすく心を蘭質の手に移せバ秋の露屡脆し緑の黛花の形ち給ふ書とも筆ゆ及びがたかりければ入道自ら横懷に抱て帳臺の内へ入給ふ佛と名をバ付たれど三明六通悟らねバ忙れ迷たる樣也けりさても申けるハ是ハうつゝならぬ御事のな祇王御前の御言の傳よこそ御目にもかゝる事こそて候へんかゝさる事侍べき忘ぬ御事ならバ後にこそ召に隨進のと深く痛て候けれ共賞レ新棄レ舊ハ世のさか人の癖なれバ入道更にゆるし給ハぞ左も右も吾云にこそ隨ハめ祇王に憚るにこそとて源大夫判官を使にて日來ハさこそ申侍りしかども移れバ替る習なれバ今は力不及御内を出べしとぞ宣ける祇王ハ夢うつゝ辨へ煩ひたり泣々申けるは去バ人の爲よハ能ても有なん悪ても有べし抑只今罷出侍バ片邊の遊者共が門前市を成てさ見つる事よと申さんも心憂侍るべし晩を待侍らバやと申す入道去けしからぬ人よていな〳〵疾罷出よ吾出家入道の身也今より後は一筋に佛を崇憑むべし佛を崇る程にては片時も祇王無詮急々と使頻に立ければ入道ハ常に見給ひける障子に思つゞけて

萌出るも枯も同野べの草。いづれか秋にあはで有べき

と書捨てこそ出にけれ其後は夜かれ日のれもし給はぞ佛が寵愛はしかまに染る褐の色。龍田山の紅葉よりも猶色深くぞ成給ふさても日來經て佛申けるは祇王が吾ゆゑ御内を出され進せていかに怨と思候らん此御所に參て御目にかゝり進そろ事もかのことの葉の末に依候けるに情ハ怨に引替てさこそ本意なく思らめ時々被召て心をも慰め歎をもやすめさせ給へと申ければ左もありとて彼宿所へ使を遣して急參れといハせければ祇王心憂事に思て返事も不レ申使角ト申せバ入道大に嗔て祇王不思議也い

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かに我使をやりたらんにいなせの返事せざるべき此内を出たると恨とか色と立る女一日なり共入道に目をかけられたるは難有面目にこそあれ千年萬年の契りや思べき佛が此にあれバとて返事を申さぬか急參れ仰に不隨バ可相計とてあらゝかに使を遣はしたり祇王も情こそかはらめ加程にや宣ふべきと思けれバ理に過て泣居たり母の閉泣々教訓しけるは西八條殿は世にも腹惡人にて思立給ふ事は横紙をやぶらるゝぞかし一天四海上﨟も下﨟も誰か其命を背く況や加樣の身として一夜の契りとてもおろかなるべきか年來有難く世を過しつるまかなひも偏に

入道殿の御恩也されバ日來の情を思ふにも參るべし後の難も恐しけれバ參るべしさらバ老たる親に憂目見せ給ふな入道殿の御心としてハ女なれバとてよも所にハ置給ハじ早出立給へとて使にハ急參べしと母ぞ返事ハ申ける祇王ハよにも心うく辱しき事あれバ淵瀬に身をも入バやと思けれ共母の事を思てこそ今まで消もうせなであれ再び入道殿へ參べしとは思はざりけれ共誠にも我ゆゑ母の肝心を迷はさんも不孝なりとて妹との祇女と同車して六波羅へ參たり入道ハ佛をろバに居て人々と酒宴して御座けり祇王祇女をバ一長押落たる廣廂にすへられたり佛ハ打うつぶきて目も見上ず祇王ハ寵愛こそきさそまらめ居所をさへさげらるゝ心うさに打しめりてぞ候ける入道宣けるハ如何に遲ハ參たるぞ佛をすへ置たればとて怨思か宿世れ道ハ今に始ざる事ぞ努々思べからず折節佛が前に杯あり一申て強よと宣ふ祇王承て

佛も昔ハ凡夫なり。我等も終には佛なり。三身佛性具しながら。隔る心ハうたてさよ

と折返折返三返までこそ歌ひたれ是にハ入道めてすもや有らん滿座哀を催して袂を絞る者もあり入道打うなづき給て景氣れ今樣をバいしくも歌たる者哉此の歌ハ雜藝集と云文に書きたるハされなし三四の句ハよけれ共一二の句を引替て佛も昔ハ凡夫也我等も終にハ佛。うたふも二人が阻られたる所を云にや猶も聞わかぞ今一度と宣ふ何度も仰にはとて

君がわけこし手枕の。絶て久く成にけり。何しに隙なくむつしけん。ながらへもせぬもの故よ

と是を二返ぞ歌ひたる入道又た打頷許此歌ハ侍從大納言師中納言の娘に相具して契あさからざりしよ何程もなくして別つゝ歎の餘よ作り出してうたひし今樣也それには我等がわけこし手枕のところ有よ一の句を引替て君がわけこし手枕と歌ふ事は入道が所を思ふなぞらへてうたふにやろれをバ祇王は如何にとして知たりけるぞ加樣の事は時に取て上手ならでは叶ふまじあはれ祇王ハ今樣は上手かな上代にも聞及バず末代にも有難とぞほめ給ふさて此後は不召とも常に參て舞ひ舞歌うたふて佛慰よよしく罪深く佛な怨ろと宣ふ祇王祇女宿所に歸て母に云けるも角て浮世にあれバころかゝる憂目をも見候へ墓なき此世と知ながら何を憑てすまふらん蜻蛉の有か無かの身を持て朝露のおけバ消ける命也女ハ心やなかるべき姿を替んと思也とて僧を請し翠の髮を剃落し墨の衣に袖替て廿一と申に實の道にぞ入にける妹の祇女も是を見て十九と申しゝ年同く尼にぞ成にける母の閉ハ此を見彼を見廻して涙を流し若人だにも思切角成給ふ老て何

れか期そべきとて共に尼に成つゝ西山嵯峨の奥往生院と云所に柴の庵を結ひゝ草葉の露の身を宿として三人菩提を欣つゝ九品の行業不退也日西山に沒時ハ遙に十萬億刹の土を思ひ風嶺松を吹折ハ近く常樂我淨の觀を凝す六時の禮賛聲澄て朝暮の念佛いと貴し都にハ祇王祇女ハ世を恨み尼に成て行方不知と披露あり佛是を聞き心憂やさしも盛の人々の花の袂を脱替て墨染の袖にやつれけん事の悲さよ吾故かく成ぬれバ思ひ歎ハ吾身にところは積るらめ移れバ替る世の習ひ吾身とても憑なし縱偕老の幸なりとてもあだに墓なき世の中は兎ても角ても有ぬべし哀れ此人々の住居ならん所を覓出して同道にも入バやとぞ思々る月日の重なる儘にさすが都近き程なれバ嵯峨の往生院にとぞ聞ける佛ハ入道の宿所をバ忍て紛出で自ら髮をハさみ落して衣うちかつぎ遙々と路芝の露かき分て嵯峨の奥へぞ尋入る夜深人定て柴の編戸を扣々り内より人立出て誰人ぞいぶせき夜のろらあやしの草の戸に尋來るべき人なし恐ろしや天狗バけ物などにやと云けれバ我身ハ太政入道殿に候し遊者の佛と申女なり我故御身々を捨て憂名を流しはて角く住居給へりと聞つれバ誰故ならんと被歎て人しれず同道にと思取り是迄參たりと云門を開て庵室に入れ纒頭にたる衣を脱たれバ遠山の黛ハかきながら亂ねども翠の黒髮も鋏刀落して尼なりけり祇王祇女泣々申けるハ浮世を厭ひ實の道ゟ入ても猶迷の心の悲さハ思歎ハ絕ずして佛だになかりせバかゝる憂目ハ見ざらましとつらき我身を顧みず只人の御事のみうらめしかりつるに角く思立給ひ々る有難さよ是も然るべき善知識にこそ今は妄念晴ぬとて四人頭をさしつどへ通夜こそ泣明せきさても一所に籠居て他事なく勤行ひけり入道是をも知らず佛を失ひたりとて是は如何せんとぞ被歎ける洛中邊土旁へ人を遣しつゝ佛をぞ尋給ふ佛も尼に成て往生院に聞給ひけれバ糸惜かりし佛なれバ尼とても何かハ苦と宣ひけれ共其こと無沙汰にてやみにけり此尼上達四人往生の志深して行業功重りければ遲速こそ有けれ共本意に任せ終り亂れず念佛して西に聳く雲に乘り池に開くる蓮にぞ生れける後白川の法皇此よし聞召し哀に貴事なりとて六條長講堂の過去帳に入られて比丘尼祇王廿一祇女十九閉四十七佛十七と今の世までも讀上げ訪ひ御座す事こそ憑しけれ

右の一章ハ源平盛衰記卷の十七より一節を抄錄せる者なるが三女の事跡を綴る文章のいと優美にして此道を學ぶ者の摸範となすべく思ふのまゝ今一字とも添削せずして原文のまゝと轉載する者なり○又た圖中の清盛は入道なるべきを畫工の

誤りにて薙髪の人物に描きしは赤面の至りなり依て不㆓取敢㆒粗漏の罪を鳴謝す

●寄書

○友達の物學ばんとあめりかに行に送る文

私立大坂女學校高等科第二級生　高橋つね子（十三年六ヶ月）

梅の花は。ゆきをしのぎて。今日ぞとの花さく春に。めぐりあひ。色をも香をも。めでられて。ぬばたまの。やみにもしるきがおとく。玉がきの。うちつみくよの。まなび事。つとよならせ給ふさへ。いとめでたきおとなるを。なほてまやかよ。ひろう物學びなし給はん。御心にて。とつ國に。わたらせ給ふとか。いとをゝしき。思したちにころ。かくては。ともどちは。おのが身も。いとはえある。心地になむ。さればいよゝ。はげみ給ひて。ときはのまつは。いろかへぞ。うきふししげき。なよ竹の。ろれくるしみと。しればせ給ひ。香くはしき名を。とゞろかし給ひなむ事を。ひとへよねぎまつる。遠き國に。行せ給ふときゝては。心ぼそりのせられ侍れど。それはたくしの事と。思ひのへしてなん。うみぢ平らかに。御身をまもらせ給ひて。御心ざしと終へ。めでたうかへらせ給へや。まづはいそぎかくは。きこゆるになむ。なほつきせぬ事。さはに侍れど。みじかき水莖には。およぶべうも侍らねば。御出立の日。えなどまで。まゐりて。たいめのをりに。御あおりをも。をしみ侍らむ。

雪のまどに。みがける君が。白玉は。
　いかよ光りの。そひてゝるらむ

あなかしこ

○同題

同學校同級生　中村かず女（十四年二ヶ月）

雨風霜雪なんどを。しのがざれば。梅の花咲く。うらゝかなる。春のころよも。あはざとかや。げにことはりにてなん。人もくれ竹の。世の中に。生れ來りたらんには。まづおのが智識を。みがき。もろ人のかゞみに。あがめられん事こそのぞましけれ。さるはお身には。とつ國にて。物學びせんと。思ひさだめ給ひしとか。いとたのもしき御心よとこそと。たもふにもよろこびあまりていとゞ別のかなしさに

とゞめあへぬ。心は遠く。そひゆかん。
　春にあふべき。君があたりに

學のわざども。早くしをへて。皇國にかへり給はん事をのみ。ひたまちに待侍るになん。外國に行給ひて後も。冬の草木のおとく。かれ〴〵に忘給はで。たえず音信させ給へや。君とも思ひて。よろこび侍らんを。あなかしこ

本號の編輯已にすり將に筆を投ぜんと欲するに臨み忽ち左の一報を得たり不取敢ず茲に揭ぐ

音樂取調所ハ昨冬政府大改革の際音樂取調掛と改稱し文部大臣官房附屬となり專ら歐洲管絃樂幷に唱歌を教授するとヽなりたるが今度新に官房附屬となりたる高等女學校も右取調掛の同構內に設立さるヽ由今ま女學校規程大綱を得たれば左に揭ぐ

一高等女學校ハ優良の婦女たるに須要なる學科を教授する所とす　一生徒は品行端正體質健康齡十二年以上にして小學科(凡六ヶ年の課程)卒業以上の者若くハ之に相當する學力を有する者たるべし　一高等女學校の學科ハ脩身。和漢文。英語。算術。理科。圖畫。家政、裁縫。音樂。體操。とす但生徒の志望に因り本文學科中一科若くは數科を欠くとを得べく又一科若くハ數科を撰びて之を脩むるとを得べし　一脩業年限ハ四ヶ年とし授業時數ハ每週三十時間とす但第三項但書の生徒ハ此限に非らず　一生徒の定員ハ凡百名とす　一授業料ハ一ヶ月金二圓とす

以上

高等女學校ハ普請まだ整頓せざれ開校ハ來月上旬なるべしと云ふ

○音樂取調掛にてハ以後洋琴(ピヤノ)特別生を廢する由尤も志願の者は高等女學校に入りて學び得る故なりと又同掛にて今年卒業すべき女生(見習生)數人ある由

● 官　報

宮內省第二號(本月十日官報)

華族女學校職員及び官等俸給を改定することヽ左の如し

明治十九年二月十日

奉　勅

宮內大臣伯爵伊藤博文

第一條　華族女學校に左の職員を置く　長、學監、幹事、教授、助教、書記○第二條　長一人勅任とす宮內大臣の命を受け學校の事を總理す○第三條　學監一人奏任とす長の命を受け教授及び校中の事務を監督す○第四條　幹事二人奏任とす長の命を受け庶務を幹理す○第五條　教授ハ奏任とす生徒の教授を掌る○第六條　助教ハ判任とす教授の職掌を助く○第七條　書記ハ判任とす長及び幹事の命を受け庶務に從事す○第八條　女學校職員等級及び俸給ハ左の表に依る

職	官等	俸	一	二	三
長	勅任	年俸	三千圓	二千五百圓	
學監	奏任	同	千八百圓	千五百圓	千二百圓
幹事	奏任	同	七百圓	六百圓	四百圓
教授	奏任	同	千八百圓	千五百圓	千二百圓
			千百圓	千圓	九百圓
			八百圓	七百圓	六百圓
			五百圓	四百圓	
助教	判任	同	四百圓	三百五十圓	三百圓
			二百五十圓	二百圓	
書記	判任	月俸	二十圓	十五圓	十二圓

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

廣告

東京女子師範學校裁縫科教員　渡邊辰五郎編

●普通裁縫教授書　全三册　定價金六拾錢　郵税半額六錢

●普通裁縫算術書　全一册　定價金廿五錢　郵税半額四錢

●女子に糸鍼の業を敎授せらるゝと既に久し其間實地に就き經驗せらるゝ處の敎授の順序方法及針の持方運び方雑巾の刺方に至るまで漏すとなく懇切に編輯せられし書にして女子には左右一日も欠べからざる好書と云べし

塚原苔園先生著

●小學女用文　全三册　定價金四拾三錢　郵税半額八錢

右は敎育の著書に綿密懇到の聞にある塚原苔園先生が世上の女子用文章に徒に月雪の雅筵小歌三味絃茶の湯等の樂會と云ひ其文章は古調に流れて日用往復の体格を失ひたる事を歎かれ例の懇切の筆を採て學校生徒農商の婦女子に至る迄の日用必須の題のみを撰び初めて文語より口上書往復文と順序を逐ひ世に云ふまゝの作るらせし文を以て著されたるものなれば實に小學校用女子の文書には此上もなき好書と云べし

發兌書肆　東京馬喰町二丁目一番地　石川治兵衛

日下部三之介校　齋藤貞藏編輯

●女兒脩身範　全三册

近來女子脩身書の上梓せるもの世に多しと雖ども女子の爲め敎科用書に適當なるもの甚た稀なり該書は編者年來敎育の實務に從事せられし經驗を以て編輯せしものなれば敎科用書に適當の良書たる疑なし今般弊舖に於て出版仕候間陸續御用被仰付度奉願上候

出版書舖　東京日本橋區元大坂町　法木德兵衛

●給ふり
學校新聞
郵劵二錢ヲ送ラハ見本ヲ呈ス
東京本鄕區元町壹丁目三番地　學校新聞社

社告

●本社は前金御拂込なき間は雜誌發送不仕候間御注文の節は必ず代價郵税共御送付可被下候●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但し實際不便不得止の地に限り一錢郵劵一割増にて御送金可被下候●爲替にて東京本鄕郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊社に送付可被下候●通運便を以て御送金の節は通運賃は勿論會社より弊社への配達料（壹錢）とも御拂置き可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

毎月五の日發　女學雜誌代價郵税表（府内無遞送料）

一册	正價金四錢	郵税一錢	合計　現金五錢
十册	前金卅八錢	同十錢	合計　前金四十八錢
廿册	同七十錢	同廿錢	合計　前金九十錢
卌册	同壹圓	同卌錢	合計　前金壹圓卌錢

廣告正價表

一行一回掲出	但廿八字詰	前金五錢
同三回以上	同	一割引
同六回以上	同	二割引

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌）　巖々堂

東京神田區雉子町	闓々社支店
同日本橋區新乾町	貝明堂
同日本橋區馬喰町二丁目	自由堂
同京橋區木挽町壹丁目	萬字堂
同京橋區銀座二丁目	山口福松
同本鄕區元富士町	盛春堂
同本鄕區春木町二丁目	解明堂
同牛込區肴町	活神堂
越後國長岡	大橋書房
大坂備後町四丁目	岡島支店

東京芝西久保櫻川町（支局）　萬春堂

發行所　本局　東京本鄕區弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

持主兼印刷人　瀧田正義

編輯人　近藤賢三

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

●普通裁縫教授書　全三冊　定價金六拾錢　郵税半額六錢

●普通裁縫算術書　全一冊　定價金廿五錢　郵税半額四錢

●女子に糸鍼の業を教授せらるゝと既に久し其間實地に就き經驗せらるゝ處の教授の順序方法及針の持方運び方雑巾の刺方に至るまでを漏すとなく懇切に編輯せられし書にして女子には左右一日も欠くべからざる好書と云べし

塚原苔園先生著

●小學女用文　全三冊　定價金四拾三錢　郵税半額八錢

右は教育の著書に綿密懇到の聞にある塚原苔園先生が世上の女子用文章に徒に月雪の雅筵小歌三味絃茶の湯等の樂會と云ひ其文章は古調に流れて日用往復の体格を失ひたる事を歎かれ例の懇切の筆を採て學校生徒農商の婦女子に至る迄の日用必須の題のみを撰び初めて文語より口上書往復文と順序を逐ひ世に云ふまゝるらせ候文を以て著されたるものなれば實に小學校用女子の作文書には此上もなき好書と云べし

發兌書肆　東京馬喰町二丁目一番地　石川治兵衛

日下部三之介校　齋藤貞藏編輯

●女兒脩身範　全三冊

近來女子脩身書の上梓せるもの世に多しと雖ども女子の爲め教科用書に適當なるもの甚た稀なり該書は編者年來教育の實務に從事せられし經驗を以て編輯せしものなれば教科用書に適當の良書たる疑なし今般弊舗に於て出版仕候間陸續御用被仰付度奉願上候

出版書舗　東京日本橋區元大坂町　法木德兵衛

●學校新聞　郵劵二錢ヲ送ラハ見本ヲ呈ス

給ひりな附

東京本郷區元町壹丁目三番地　學校新聞社

…代價郵税共御送付可被下候●郵便切手代用は堅く御斷り申上候但し實際不便不得止の地に限り一錢郵劵一割増にて御送金可被下候●爲替も東京本郷郵便局へ向け御振込被下其爲替劵を弊社に送付可被下候●通運便を以て御送金の節は通運賃は勿論同會社より弊社への配達料（壹錢）とも御拂置き可被下候●詩文和歌發句等の原稿御投寄の節は作者の國郡町村姓名等明細に御記入可被下候

女學雜誌代價郵税表（府内無遞送料）

每月五の日發

	正價	郵税	合計
一冊	金四錢	一錢	現金五錢
十冊	前金卅八錢	同十錢	前金四十八錢
廿冊	同七十錢	同廿錢	前金九十錢
卅冊	同壹圓	同卅錢	前金壹圓卅錢

廣告正價表

一行一回揭出	但廿八字詰	前金五錢
同三回以上	同	同一割引
同六回以上	同	同二割引

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町（大賣捌）　巖々堂

東京神田區雉子町　團々社支店
同日本橋區新𢭏町　頁明堂
同日本橋區馬喰町二丁目　自由堂
同京橋區木挽町壹丁目　萬字堂
同京橋區銀座二丁目　山口福松
同本郷區元富士町　盛春堂
同本郷區春木町二丁目　解明堂
同牛込區肴町　活神堂
越後國長岡　大橋書房
大坂備後町四丁目　岡島支店

東京芝西久保櫻川町（支局）　萬春堂

發行所

本局　東京本郷區弓町壹丁目廿番地　女學雜誌社

持主兼印刷人　瀧田正義

編輯人　近藤賢三